

5 畜産総合研究センター機関評価結果

(1) 前回評価での指摘事項への対応状況

フォローアップ機能の充実

前回指摘事項について前向きに取り組んでいる点は、一定の評価ができる。特に18年度から試験研究成果フォローアップ委員会を立ち上げ、強い普及推進を図ることを掲げている。

フォローアップについても進捗管理ができるよう、アウトカム(成果)の指標を具体化し、普及方法等の改善や更なる課題の抽出へ結びつけ、普及についてもPDCAサイクルを回すようにすることが肝要である。

また、フォローアップ委員会については、今後運営のあり方を定期的に見直すなどして、制度を無理なく定着させることが肝要である。

施設・機器の整備への県の支援

依然として、施設の老朽化や、耐用年数切れの機器類が多数あり、研究費の中から補修のための費用が捻出されている。畜産は、全国でも6位と千葉県の主力の産業であり、県としての支援策を検討する必要がある。

(2) 県民や社会のニーズへの対応について

自発的テーマの明確化

県民ニーズが潜在的なニーズであっても研究機関として行うべきテーマをもっと明確・明瞭化し、主務課へ強調すべきである。

県民ニーズ、基本目標、研究課題及びアウトカム指標との対応関係の明確化

意見交換会や研究者同士の交流などいくつかの機会によりニーズを把握しており、今後もこの方針を維持願いたい。具体的なニーズのデータが明示されていない。具体的なニーズデータと千葉県農林水産業試験研究推進方針の7つの基本目標と22の大研究課題等との対応関係を明らかにすることが肝要である。

また、普及段階でのアウトカムを見据えた推進体制を整備したのであ

れば、上記の事項とアウトカム指標との対応関係も明示する必要がある。

企画管理部門の充実

千葉県の畜産は形態が多様であり、ニーズも多様となるが、多くのニーズに万遍なく取り組むのではなく、優先順位を明確にし、「畜産業の維持」を最優先とした研究技術の開発が行われるべきと考える。そのためには、ニーズを分析・評価して研究課題と内容・目標を設定する企画管理部門の情報収集能力、指導性、調整能力を強化することが必要である。

研究の深化

社会の一般的なニーズとして、研究機関は常に最先端の研究分野についての情報保持とその研究推進への応用・実践が求められており、畜産の分野では、例えば分子生物学（ゲノム研究や蛋白質工学）がある。

そのためには、最先端の分野の研究者の採用又は育成を念頭に、研究企画部門が全体のバランスを考え、研究者の配置を中長期的に考えることが重要である。

(3) 研究遂行に係る環境について

人的要素を中心とした組織の再整備

研究員は、平成15年度52名から平成19年度は40名へ23%減少している。さらに、人員構成は、50歳以上が過半数を占め、20代はわずか2名である。

また、本場のほか乳牛研究所は2箇所分散しており、内1箇所では農家からの依頼による成牛までの飼育を行っている。

研究技能を伝承してこそ継続した研究が実施できることにかんがみると、乳牛研究所のあり方と研究者育成を効果的に行うための環境づくりの視点から、人的要素を中心に組織の再整備を検討することが肝要である。

研究者数の回復と組織運営の改善

近年の研究者数の減少は、今後の研究遂行に係る環境にマイナスの影響を及ぼさないかが懸念され、一つの組織としては減りすぎているとい

う感がいなめない。農業県千葉として、試験研究の位置付けから、また、畜産総合研究センターの畜産業支援業務の重要性から、研究要員数回復を期待したい。

一方、減量体制下では、組織運営の改善についても考慮すべきである。畜産総合研究センターでは研究サポート要員の数が一定に保たれていることが評価されるが、サポート要員の業務の内容を高度化して研究者の負担を軽減させるというような内部の努力についても検討すべき時期にあるのではないか。

(4) 研究成果について

論文発表時の知的財産権の保護

研究成果を論文発表する際に、開発段階のノウハウの記載については、知的財産権の保護について配慮すべきである。

具体的な成果に関する評価と国内普及

個体識別に関する「豚の親子判定」の成果は、平成18年に特許出願し、「房総ポークC」のトレーサに利用され始めており、トレーサビリティのシステムを支援し、千葉県産豚肉の産地間競争力の強化に寄与するとともに、遺伝子研究の推進という面からも高く評価される。

「バイオディーゼル燃料 副生成物」の研究はリサイクル利用の排出物の農業的な利用を可能にした成果であり、資源循環型社会の技術ループを完成させたものとして高く評価される。

また、「未利用資源の養鶏用飼料利用」は、都市型の農業の将来性を見据えた研究と言え、その成果も資源循環型社会の構築に寄与するものであり、かつ、地鶏への給与という、地域特産物の生産に寄与することも含めて高く評価される。

千葉県ならでの研究成果が、今後は更に増えていくことに期待したい。

なお、食と農については、環境に配慮した安心安全を国民は求めているところであり、上記の方法等の研究成果を県内普及に留めるのではなく、国全体に普及するようリードすべく、県の主務課や国に対して施策

を要請していくことが肝要である。

トレーサビリティ：スーパー等で販売している食品が、いつ・どこで・どのように生産・流通されたかを知ることができるシステム。「トレーサビリティ」は「追跡可能性」と訳される。

バイオディーゼル燃料：各家庭や飲食店等から回収した廃食油などを利用してディーゼルエンジン用の燃料としたもの。軽油の代替燃料となる。

成果の学会誌等への発表

研究機関の評価を高めて外部資金等の導入を図るため、研究成果の中で特筆すべきもの、あるいは広く社会に広報すべきものについては、学会誌等、全日本的、全世界的な媒体に発表するような体質を持つようにすべきである。

(5) 研究開発以外の業務について

学校教育における啓発と食育への支援

農林水産の学校教育における啓発を、県で統括的・効果的に展開することを検討すべきである。

なお、本研究センターには、「家畜を飼い、命をいただく」という、畜産に関する食育教育ができる人材がプールされているので、出前授業等、業務に無理のない範囲で、子供たちの食育への支援を行うべきである。

経営体の育成、強化

様々な研修会等や現場指導により、技術指導や技術教育支援を行っていることは、畜産の後継者の養成のためにも重要であり、一定の評価ができる。

千葉県農林水産業試験研究推進方針の基本目標に位置付けている経営体質の強化について、都市型と中山間地型の違いや、価格ではない付加価値創造という質の改革による経営の研究や指導等の推進を検討する必要がある。

畜産総合研究センターの機能

本研究センターは、自治体の研究機関としての宿命上、研究開発があ

くまでもコアではあるが、千葉県の畜産業の振興のためにも、畜産技術全般に関して技術支援を行わなくてはならない存在でもある。

したがって、現在の業務については、引き続き推進願いたい、その際には、研究と技術支援の間のフィードバックを常に考えながら仕事を進める必要がある。

動物福祉についての情報収集・状況調査の実施

動物福祉に関する情報(EU 基準)の収集や、千葉県の状況調査を他の機関(農業共済組合や農林振興センター)と協力して行っておくべきである。

(6) 今後の研究の方向性について

経営体質の強化

国際化に対応できる経営体質の強化に関して、畜産物の安全性や旨味などの感覚価値を高めながら、どのように経営体質を強化していくかといった点に留意した継続的な技術的追求が必要である。

基本目標の具体化

今後の研究の方向性は、千葉県農林水産業試験研究推進方針の7つの基本目標に含めて記載しているが、小規模な環境下で実施可能なものをより具体性を持った目標にし、その下で研究課題との相関関係を明示することが肝要である。

環境対策

混住化の流れの中で、周辺環境や周辺住民との共存のための対策が、畜産にとって重要性を増すのではないか。

遺伝資源の確保

国内の産地間競争に勝ち抜くための一手法として、畜産物のブランド化があるが、そのためには遺伝資源を確保する必要があり、在来種の維持、あるいは系統造成に関して、戦略と戦術の提示を検討願いたい。

地球温暖化への対応

乳牛や豚を中心に暑熱対策の研究が今後重要となるので、畜舎環境、飼料選択、飼料設計、衛生管理、畜産物の生産性と質(乳量と乳質等)、

モニタリング手法等々、夏期暑熱時の家畜管理についての情報収集と調査、技術の体系化、試験研究として行うべきは何かを検討願いたい。

(7) その他

なし

(8) 総括

研究テーマとニーズとの分布データの作成

研究テーマの重要度ランクと県民ニーズ又は期待効果とを二軸に整理した分布データがあれば、研究資金と人材の全体的投入計画が見え、対外的なアピールの上で有効なので、その作成を願いたい。

目標値、研究計画及び全体計画の明確化

P D C Aサイクルを回すために、各研究テーマごとに目標値の明確化と具体的なプロセス計画を組んだ計画表を作成する訓練を行っていくことを期待する。

なお、その際には、フォローアップ委員会を設置したことであるので、研究から普及までの全体計画を明らかにし、その下で各課題の研究や普及の進捗管理を行う工夫が必要である。

千葉県の実地に即した研究の充実

畜産は、地域性がそれほど顕著に現れる領域ではないだろうが、県民への還元を更に明確にするため、効果的脱臭技術の確立の研究課題のように、千葉県の立地に即した研究の一層の推進を期待する。

ニーズの見極めと存在感の確立

本研究センターは、ニーズの多様化、深化の中で、定員の削減下でありながら、努力をし、良い成果をあげていると評価している。

現在、長期にわたる飼料価格の高騰下で、畜産農家が大変苦勞していることを念頭におき、多様なニーズの中で、何が今、必要かということを確認に認識しながら、本研究センターの存在感を農業者と消費者に認識させることに努力願いたい。